

W
OMEN'S

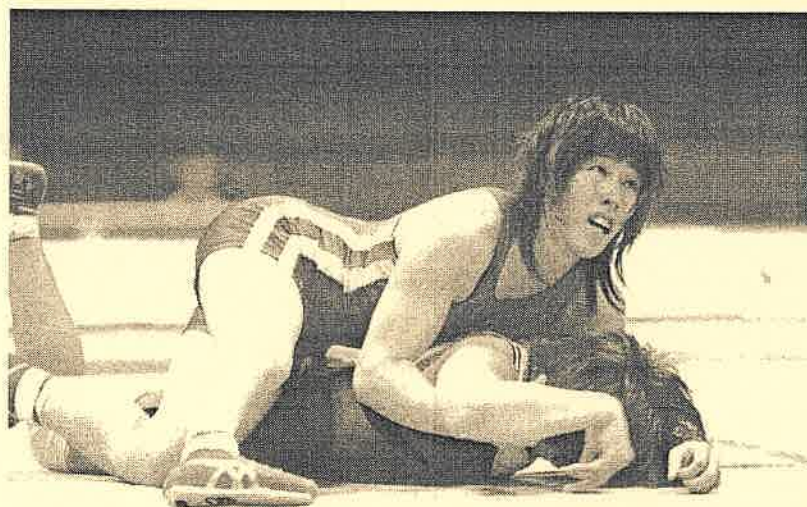


NEWS

2006 JUNE

VOL.45

S
PORTS



平成17年度レスリング天皇杯 女子55kg級・吉田沙保里
(フォート・キシモト)

F
OUNDATION

J
APAN

Message 4半世紀前のエピソード ミツ谷洋子	2
インタビュー 後に続く選手のための環境整備が大切 大日方邦子さん ...	3
Opinion 高齢者体操教室に見えるジェンダー・バイアス(上) 北田和美 ...	6
TIME TRAVEL 「スポーツ」「社会」	7
Women's Sports 女子サッカーに携わって 猪浦玲子	8
Column 社会を前進させたビリー・ジーン・キングの功績 山崎恵司	9
会員の広場 竹内里摩子さん 中村久子さん 榊井映里さん	10
事務局便り	11

4半世紀前のエピソード

今号の column 欄にあるビリー・ジーン・キングについて、私はWSFジャパン設立のきっかけとなった1980年の第1回国際女性スポーツ会議開催にまつわる裏話をご紹介します。

私がジャーナリストとしてスポーツにかかわる多くの人たちを取材して感じたのは、女性には男性にない困難や障害があるということでした。国や種目、選手や指導者など立場は違っても、その状況は似通っていました。

さらに日本は欧米諸国に比べると、女性をとりまく環境は驚くほど遅れていました。そうした状況を改善しようにも、スポーツ団体の理事は男性ばかり。男性理事が、女性の問題を解決してくれることなどあり得ません。

パネリストの中心はWSF創業者

ならば女性たちが組織を作って、社会に向けて意見や提言をしていけばよいのではないか。それが私の結論でした。ただ、無名の私が一人で何かをいっても、誰も耳を傾けてくれるはずはありません。

そこで、有名な女性たちに、女性ならではの体験や問題について語ってもらうことにしました。それが第1回国際女性スポーツ会議です。世界のトップスポーツウーマン7人によるシンポジウムで、中心人物として考えたのがWSF創業者であるキングさんです。

1年ほど前から、試合で来日するたびに彼女を捉まえ、雑誌用のインタビューをしたり、WSFについて質問したりしながら、会議の主旨を書いた手紙を渡して、パネリストとして来日して欲しい旨を伝えました。

「それは素晴らしい会議ね。具体的な話はマネジャーを介して話してください」という返事をもらい、準備を進めることにしました。

ところが開催2ヵ月前の8月になって、交渉が行き詰まりました。モスクワオリンピックの取材からもどった私は、急遽ラスベガスに行くことになりました。会議事務局から、「説得できるのはミツ谷さんだけ。すぐにいってほしい」というのです。

残された財産の大きさ

ラスベガスのリビエラホテルでは、秋に予定している女子プロテニス大会の記者発表が行なわれることになっていました。キングさんはメインゲストとして招かれていました。

会場に何とかもぐり込み、「なぜ、東京の会議にこられないのか。金銭的な理由であれば交渉もできる」と伝えたかったのですが、主催者は私に声をかける機会をくれませんでした。

諦めきれずにサンフランシスコのWSF事務局を訪れると、事務局長のオーチンクロスさんがにこやかに出迎えてくれました。

「東京の会議はプレル（パネリストの1人＝オーストリアのスキー金メダリスト）から聞いています。有名選手がこんなに集まる会議は聞いたことがありません」と元気づけられる言葉。

さらに「ビリー・ジーンは、最初はよい返事をするけれど、キャンセルすることも多い」という一面があることを知り、ようやく納得することができました。

結局、創業者の招待はかないませんでした。WSFジャパンは「キング夫人が米国で作ったWSFをお手本にしている」という説明が、新たな組織の信頼度につながりました。

その意味で、彼女は私たちに大きな財産を残してくれたといえるでしょう。

インタビュー

後続く選手のための環境整備が大切です

トリノパラリンピック チェアスキー金メダリスト 大日方邦子さん

4回目の出場となった先のトリノパラリンピック。金メダル1個、銀メダル2個と、日本選手では最高の成績を残した大日方邦子さんは、まだまだその結果には満足していません。技術面を伸ばし、これからも自分らしい滑りを大舞台で披露できるよう努力していきたいと語る反面、NHKの教育番組のディレクターとしても大忙しです。そんな大日方さんにスキーとの出会いや魅力、明るく前向きなその姿勢の原動力などについてお話をうかがいました。（5月16日＝聞き手：吉沢直美）



トリノパラリンピック女子大回転座位優勝の滑り(フォート・キシモト)

目標は自分らしい滑り

— トリノパラリンピックでのご活躍、振り返ってみてどのような大会でしたか。

大日方 4回出場した中では、自分らしい滑りができたかなと思いますが、結果は100点とはとても言えません。私が一番大切にしているのが“自分らしい滑り”。練習での成果を表現することですが、これが難しく最大課題です。本番に弱いんです、私。

— え、本当ですか。

大日方 練習では別人の滑りと言われていました。
— それにしてもモチベーションを高く持ち続けるのは大変だと思うのですが、原動力は。

大日方 もっともっと自分を出し切りたい、技術的にも高めていきたいと思っています。奥が深いスポーツなので、その魅力に取り憑かれていますよね。スキーって長くできるスポーツで、オーストリアでは、80歳くらいのおばあちゃんまでスキーの板がついで、バス停で待っていたりするんですよ。日本じゃ行先はデイクアセンターですよ。（笑）

— 大日方さんはできる限り長く競技を続けていきたいとお考えですか。

大日方 ええ。でも世界のレベルはどんどん高くなっていますので、追いついていくには質量ともに今以上に高めていく必要があります。でも、

私たちのチームは活動資金が不足していて、個人負担がほとんど。現状でも年間300万円くらいかかっていますので、今以上は難しいですね。

— 大日方さんはスポンサーがついているとうかがっていますか。

大日方 用具提供などの協力は頂いてますが、練習費用の負担や報奨金などはありませんので、オリンピック選手とは異なる状況です。そのあたりを変えないと、若い選手が育たないでしょう。この先の4年間は自分の選手活動だけでなく、組織強化や資金集めなどの活動にも力を注ぐ必要があると思っています。

— 海外の選手はどんな形でやっていますか。

大日方 プロとしての参加がほとんどです。他の多くの先進国同様、日本も障害者スポーツとしての括り方ではなく、競技として、オリンピックもパラリンピックも1つになるような仕組みができればと思っています。将来的には、スポーツ省のような行政組織ができることも必要ですね。

入院した病院で車椅子レース

— 新聞記事によると、ご両親は小さい頃に事故にあわれた大日方さんには「家に閉じこもってほしくない」という教育方針だったそうですね。

大日方 3歳の時に怪我をして右足を切断。左足も負傷して、約2年半の入院生活をしました。お転婆だったようで、子供用の車椅子に乗れるようになると、病院中を車いすで走り回っていました。

— 怪我を悲観したりはしなかったのですか。

大日方 深刻に考えないというか、おめでたいくらい楽観的なんです。子供の頃「そのうち新しい足が来るよ」って両親に言われ、本当にそうなるって思ってたから。

— その言葉はすごいですね。

大日方 母も大変だったはずですが、そうした様子は子供の前では見せず、色々なことの地慣らしをしてくれました。25年ほど前は障害を持つ子が普通校に行くのは一般的ではありませんでした。

そんな時でも「大丈夫です!」と、許可をもらうために奔走してくれました。

— お母様はかなりパワフルな方の方ですか。
大日方 私以上にパワフルです。「行くわよ。ついてらっしゃい」って感じですよ。

— パワフルなところはお母様譲りですか。

大日方 そうですね。だから家に閉じこもるなんてあり得ない。やりたいことはやってきました。「ダメ」と言われると「何でダメなんだ」って思いました。「ダメ」と言われる壁はあったけれど、自分の中に壁はありませんでした。

母と、とても頼りになる2歳下の双子の弟たちの影響は大きかったと思います。運動会の時に「行進が揃わない、見学してください」と学校側から言われ「じゃあ、揃えばいいんでしょう」と、弟たちと庭で行進の練習をしたりしましたね。

— ところで、お父様はどんなお仕事を。

大日方 父は海洋の仕事をしていて、海に出ることが多かったのですが、日本に寄港すると皆で「さあ旅行だ」と車で出かけていきました。エネルギーな家族です。(笑)

開放感がたまらないチェアスキー

— 高校2年生(17歳)の時にチェアスキーを始められたそうですね。

大日方 義足を直しに横浜市のリハビリセンターに行った時、「チェアスキー」の実物を見たんです。立って滑るスキーをしたかったのですが、ドクターに「無理」と言われ断念していたので、座ってスキーができることをその時、初めて知り、「やるやる!」となりました。

— スキーはずっとやりたかったのですか。

大日方 雪の上に立ってみたい、一面の銀世界ってきれいだろうなって思っていました。

— すぐに始められたのですか。

大日方 翌シーズンの初心者講習会に1人で参加したら、すごく気持ち良く、楽しくて、風を切って滑る開放感がたまらなかつたですね。

— 当然、転んじゃったりとかしますよね。

大日方 いっぱい転びました。でも、それも楽しい。無我夢中。やりたくなると何でもやります。

— 競技としてチェアスキーを始められたのは。
大日方 大学生になり、競技としてやってみないかと誘われました。

— 2年生ですぐにリレハンメル大会に出場。それだけの短期間で、どう取り組まれたのですか。

大日方 最初は何かかなと思っていましたが、強化合宿のレベルの高さにびっくり。「大変な世界に入ってしまった」と。ただ、このままオメオメ帰れないぞとは思いました。



(撮影：高橋昭子)

当時、長野に向けて若手育成の特別枠があり、「わーい、海外に行けるぞー」という乗りでしたが、日本の代表といわれ頑張りました。

— たとえほどのようにされたのですか。

大日方 合宿&自主トレと、先輩の家を渡り歩いて練習に励みました。最後の壮行試合で体調を崩して救急車で運ばれました。3日ほどで回復して、リレハンメルへは開き直って行っちゃいました。

その後、パラリンピックの大会自体がすごく変化・進化し、参加がシビアになりました。自分の中でも世界のトップ選手と接して、この状態でここにいちゃいけないと思いました。長野までの4年間で競技者としてのベースができました。

— 就職先にNHKを選ばれた理由は何ですか。
大日方 自分から発信していくこと、ものを作りたいという気持ちからNHKを受けました。スキ

ーと就職は直接、関係ないですね。

発信するという点では、本を出す予定です。(『壁なんて破れる—パラリンピック金メダリストの挑戦』発行：日本放送出版協会) 障害を必要以上に意識せず、余裕を持って楽しく生きようという、メッセージを込めました。

男性基準で少ない女子トイレ

— 現在、ディレクターをされていますね。選手生活との両立はどうされていますか。

大日方 基本的にはどちらもやろうと思っています。幸い職場が選手活動を後押ししてくれるので、10月から3月までのシーズンは、スキー場と東京を行き来しています。

— 競技をやる上で、女性ゆえのご苦労や改善してほしいことはありますか。

大日方 いっぱいありますよ。特にスキーは屋外スポーツなので、圧倒的にトイレ問題です。男性基準で女子トイレは少なく、車イス用のトイレは特に少ない。それでやめてしまう人もいます。

私が所属している日本障害者スキー連盟のアルペンスキーチームは、女子が強いので「女が決める」という雰囲気ですが、スキー界は男性優位でFIS(国際スキー連盟)などの女性役員は大変そうですよ。ヨーロッパの女性でもお酌するんです。男性の考えで運営されていることは多々あるので改善の余地あり、ですね。

— お忙しい中、ありがとうございます。

(豪快な滑りとは打って変わって、とても優しくかわいらしい声の話し方が印象に残りました。)

おびなくにこ

<大日方邦子さん略歴>1972年東京生まれ。3歳の時に交通事故で両足を負傷。高校2年生でチェアスキーを始め、パラリンピックには94年リレハンメル大会から出場。長野で金銀銅、ソルトレークで銅2、トリノのメダルを含む計8個は日本最多。日本パラリンピック委員会が唯一の女性運営委員。日本パラリンピアンズ協会副会長。NHK勤務。

Opinion

高齢者体操教室に見えるジェンダー・バイアス(上)

—スポーツ・オウエンス21の活動から—

北田和美

●はじめに

「介護予防」という言葉も一般化されてきましたが、高齢者には、従来からの社会的に決められた男らしさや女らしさとらわれた人が多いのが現状です。高齢者教室として、健康づくりのための運動指導が行われている現場で起きている問題について考える機会を得ましたので、ご紹介します。

●男たるもの、女たるもの

地域では、高齢者の健康づくりを目的として、身体活動量を増やし、日常生活を送りやすくする為の運動、いわゆる介護予防を目的とした活動が実施されています。そこでは男女の参加者が様々なジェンダー・バイアス(「らしさ」から生まれる偏見や先入観)の影響で、のびのびと体を動かすことが阻害されていると感じます。

ステレオタイプの観念が根底にあるため、指導者がバランスよい体の使い方や健康のために必要な運動内容を実施しにくい現状があり、成果を上げるために苦慮している様子が伺われます。

●地域へ広げたいが・・・

「高齢者体操教室」という催しは、市町村の保健センター主催で行われていますが、実施できる回数や参加できる人数は、予算や場所の関係で限定されます。そこで、地域内へ広げるしくみとして、「老人会」組織を活用しています。すなわち、体操教室を見学して、自分達の近くでもやりたいという希望があれば、老人会を通して各地域で立ちあげられることになっているのです。

===スポーツ・オウエンス21とは===

長く実技指導に関する講習会を中心に活動してきた大阪女子体育連盟では、情報提供やネットワークづくりの重要性に注目し、1999年から新たな事業として、「女性スポーツセミナー・大阪」を開始しました。この活動をさらに広く実りあるものとするため、2003年3月に事業として独立させ、名称を「スポーツ・オウエンス21」と改めました。

「オウエンス」(OWEMS)は、Osaka Women's Empowerment of Sportsの略。併せて日本語の「応援する」に結びつくことから、女性のスポーツ環境を向上させようとする人々が集まる会であることを訴求しています。その背景には常にWSFジャパンの影響と協力があり、会の発足は、20周年を迎えたWSFジャパンとの共催形式という、記念すべきスタートとなりました。現在、「教育」「体育/スポーツ」「ジェンダー」の3つをキーワードに、身近な課題を掘り下げ、21世紀の新しい女性スポーツを応援するために大阪から地道な発信を続けています。

ところが、見学に来て、「私たちもこんな活動が近くにあればぜひ参加したい」という希望を持つのは多くが女性だそうです。そして、役員会に働きかけるのですが、老人会の会長はほとんどが男性。役員も男性が多く、その役員たちがO.Kと言わない場合は立ち上げは難しいのです。このように決定権は男性にあるため、保健センターでも活動を広げようと各地区へ働きかけはしていますが、なかなか受け入れられない現状です。

●なぜ男性が嫌がるのか

男性が拒否を示す主な理由は、「音楽を使うとお遊戯のようだ」「男がそんなことをやれない」「女に負けたくない」あるいは「みっともない格好を見られたくない、見せたくない」「そんなことをすると俺の値打ちが下がる」という思いです。

「男のバカと女の利口は一緒」「あんた、女だからだまるとき!」「そんなことは女のやることや、昔から決まってる!」という日常的な発言や態度に、色濃い男尊女卑の考えやジェンダーバイアスが見受けられます。これは、大阪府下の衛星都市、保守的な土地柄で起こっている現実です。(つづく)

<きただ・かずみ> スポーツ・オウエンス21事務局担当、大阪女子短期大学助教授、大阪女子体育連盟副会長。WSFジャパン会員。



スポーツ・オウエンス21の会合風景

TIME TRAVEL

WSFジャパンがスタートした4半世紀前の女性スポーツの状況や社会を振り返り、どんな変化があったのかを考えてみましょう。

スポーツ

日本女子プロゴルフ界初の3千万円プレーヤー 岡本綾子



<1981年11月1日:朝日新聞> 女性の強さはついにゴルフ界にも。“世界の”といわれる青木功の今期の稼ぎ、4千16万円は別格として、男性プロの2位、倉本昌弘がまだ2千7百万円だから、岡本綾子の賞金獲得額3千23万円は男の仲間も顔負け。

<2005年は> 国内獲得賞金ランキングを見ると、1位の不動裕理が1億2千2百万円、2位の宮里藍が1億1千4百万円で上位2人が1億円プレーヤー。25年たち約4倍のアップ。ちなみに男子も1億円プレーヤーは2人で、1位の片山晋呉が1億3千4百万円、2位の今野康晴が1億1千9百万円だった。

社会

がんばる中高年・既婚者「婦人労働白書」 パートの割合増加 対男性 賃金格差広がる

<1981年10月21日:朝日新聞>

「雇用における男女の機会均等と待遇の平等」をスローガンに、21日から婦人労働旬間が始まるが、それに先立ち労働省は「婦人労働白書」をまとめた。それによるとパートを含めた女子労働者の賃金は男子の53%と格差は3年続きで拡大した。

女子雇用者の平均年齢は34.8歳、平均勤続年数は6.4年。女子労働者の平均給与は月額約17万5千円(男子約32万8千円)。女子労働者全体に占めるパートタイマーの割合(266万人・女子雇用者の2割)が増えているためと見ている。平均時給は524円。

<近年は> 2004年の厚生労働省の調査によると、女性一般労働者(パート除く)の平均年齢は41.3歳、平均勤続年数13.4年。所定内給与額は22万5千600円。男性一般労働者33万3千900円。

男女間賃金格差(男性=100とする女性の給与額)は67.6と緩やかな縮小傾向が続いており、女性給与が増加、男性給与が減少したため。女性パート者数は857万人で女性雇用者に占める割合は39.9%と4年ぶりに低下。平均時給は904円となっている。

